

# 藤村操の「哲学的自殺」についての 精神病理学的一考察

堀 正 士

## はじめに

自殺行為には様々な心理的要素が働いているとされる。従来、この中の一つとして哲学的要素が挙げられている（榎本，1996）。この要素を心理的背景とする「哲学的自殺」は純粹自殺とも呼ばれ、思弁的に死を純化し、合理化し、理論化した自殺であるとされる（大原，1975）。筆者が様々な場所で自殺予防に関する講演・講義を行って感じることは、この「哲学的自殺」の存在を信じて疑わない人たちが未だに非常に多いことである。「哲学的自殺」の典型例として現在まで語り継がれているのが、当時一高生であった藤村操の華厳の滝での投身自殺である。一学生に過ぎなかった操の死がこれほどまでに世間の耳目を集めたのは、それまでの自殺の背景として考えられていた「ありきたりな」心理・社会的背景が彼の自殺の動機ではなく、きわめて個人的に人生とは何かを問うという、純粹な哲学的発想がその背景にあったとされるからである（加藤，1975）。操は投身自殺を図った華厳の滝の脇にあった檜の木の幹に「巖頭の感」と題する遺書を書き残している（写真1）。そこには「万有の真相」を追求したが「不可解」であったために死を選んだという趣旨の絶筆が書き記されている。ちなみに、華厳の滝の所在地である日光の町役場所蔵の変死簿の第1ページに操の名前が記載されており、その自殺原因の欄には「哲学研究のため」と記されているが、これは当時の社会的解釈を反映しているものと思われる興味深い。今回筆者は平岩昭三氏の著書「検証 藤村操—華厳の滝投身自殺事件—」を中心に、操の友人に宛てた書簡や当時の新聞報道などを分析し、彼の行ったとされる「哲学的自殺」について興味ある所見を見いだしたので、若干の考察を加えて報告する。

なお、操と思われる遺体の損傷が激しく当時の検死技術では断定が出来なかった（平岩，2003）とされ、またその後生存説が流れるなど操の既遂の真偽については未だに明らかではないが、本稿では従来通り彼が既遂したと考え、論を進めていく。

## 1. 哲学的自殺とは何か

榎本（1996）は自殺の心理的背景における哲学的要素について「無邪気な児童期を過ぎ、抽象的思考の世界に開かれ、自分と向き合い、人生の意味、人間の生き方、自分の生の意味やあるべき姿を自らに問い、探求していく青年期には、人生の意味を巡る哲学的な葛藤は自殺の重要な構成要素となる」と述べている。「哲学的自殺」について、大原（1975）は「この自殺を自殺の代表的なものであると

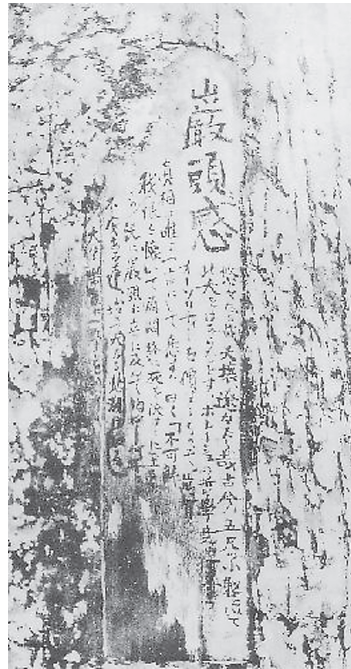


写真1 巖頭の感（朝日新聞社「朝日クロニクル20世紀第1巻」より転写）

見なす習慣は、我が国独特であり国外ではあまり見られない」と述べている。また、カミュ（1969）は著書「シーシュポスの神話」の中で「いまだかつては、存在論的論証の結果を理由としてひとが死ぬのに出会ったことがない」と言い切った。さらに、この論証の過程を「不条理な論証」と名付け、これを極限まで厳しく貫いた人々を見たことがないとも述べている。一方で唐木（1950）は自殺を「自己判断による安楽死」ととらえ、日本における自殺の特殊性についての論考を展開している。彼は「思想と感情の乖離」が自覚されると心理的葛藤が生まれ、結果として思考はある程度妥協と折衷を必要とするが、それを許さぬ者は自殺に追い込まれると言う。そして「思想が思想として芽生え、自己が他との区別において自覚されてくる青年期において、多少でも思索的傾向を持つ者が悩まずにはいられないところの、理性と本能、意志と感情、思想と骨肉、合理と伝統との対立の問題は、社会的にも決して解決されていない。常識という便利にして無方向な物が、それを曖昧化することによって、まあまあという場所に追いやっているだけである。多くの思想人を苦しめ自殺せしめた原因は除去も治癒もされていないのである。」と述べている。精神医学的にこの「対立の問題」の背景には古くはクレッチマー（1958）が提唱した青年期危機という生物学的・心理学的不均衡があると考えられる。これは精神と身体の発達の不均衡から来る、観念先行と衝動や気分易変性のような自己コントロール困難な感情の揺れの結果であると推察されているのだが、唐木はこの状況をまさに「哲学的自殺」の本質であると主張しているとも解釈できる。さらに、彼は操の死について「自我の思想の芽生えに対して日本語はついに無縁であり、その無縁が『不可解』をして、手放しの不可解に追いやった

のである」と主張している。このように唐木は当時青年独特の疑問に答える市民社会の機構が成立していなかったことが操を含めた青年の自殺に大きく影響していると考え、当時から彼の論考の時点まで続いていた社会文化的背景を痛烈に批判している。この指摘は中村（1972）の批判を待つまでもなく、青年期に自殺をしない者の数の方が遙かに多い現状を説明できず、また操個人の自死の動機を説明するには余りに表面的すぎると言わざるを得ない。操自身の自死の原因を解明するためには、彼自身の自死に至るまでの生活史を精神医学的視点から丹念に追ってみる必要があるだろう。

## 2. 藤村操の生活史と自殺までの経過について

### 1) 家族背景と性格傾向

操の父胖は明治32年6月に死亡している。その死因は病死とも自殺とも言われているが、平岩（2003）の調査では胖が自殺したという事実は判明しなかったという。一方で、江藤（1970）は著書「漱石とその時代」の中で、当時一高の英語教師であった夏目漱石と操の関わりについて記載している。その際、「藤村操の自殺の背景にはおそらく神経症があり、さらにその背後に自殺した銀行家の父からの体質遺伝があったことは疑う余地がない」と述べており、胖が神経症<sup>注1</sup>に罹患した末の自殺であったと主張する。これが事実であるとすれば、操は何らかの精神疾患の負因（遺伝要因）を父親から引き継いでいる可能性がある。

一方で平岩（2003）によれば、操は身長5尺5寸と当時の若者としては体格もよく、まじめで勉強もよくする反面、しばしば隅田川でボートを漕ぐ明るい快活な少年であり、神経質で陰気な感じはなかったという。このことから操の元来の性格傾向はむしろクレッチマー（1960）の提唱した循環性格に近いものと推察される。

### 2) 自殺に至る経過と精神症状

そんな操の人となりや生活態度に変化が見られたのは、ちょうど自殺する1年前の春の頃であったようだ。操は友人の二高生南木性海にたびたび書簡を書いている。以下、平岩の著書（2003）より時系列に書簡の本文を抜き出し、その背後にある精神症状を分析してみる。

自死の約7ヶ月前「僕此頃又運動がいやになつて来たドウモ悲観に陥り易くて困る、之れは一は信仰を有せざるによる事であらうし、一は又哲学知識の足らざる為であらう、……ドウモ相変わらずの煩悶子であつて困る」（明治35年10月17日付）との書簡を送っている。身体を動かす行為がおっくうになるというのは、精神医学的には運動制止あるいは意欲減退を意味する。また、操はこの時期抑うつ的・悲観的になりやすいことを自覚している。しかし、その原因を信仰心のなさや哲学的知識の未熟さからくる物と考え、病状の一つであるとは自覚していないようである。その約2ヶ月後「嗚呼如何したら宜いであらうか、僕は日々益々自己の弱きを嘆ぜざるを得ない、此間は俗世間が気に入ら

注1) 現在汎用されている診断基準の手引き（DSM-IV-TR, ICD-10など）では、「神経症」という言葉は診断名として使用されていない。かつての「神経症」は精神医学的な多くの状態像を含んでおり、現在ではこれらは気分障害、不安障害、身体化障害、解離性障害などに分配されている（小此木, 2001）。

ぬなどとツブヤいたが、昨今は全く自分がいやでしかたがない、僕は今や哲学的懷疑と、倫理的煩悶とが同時に来襲して来たので、其苦痛は到底言語筆紙の表はし得るところでない、差当り僕は自分の意力の甚だ薄弱なることを認めて苦悶に堪えぬのである」（明治35年12月25日付）と書いている。この時期には自己嫌悪の感情と自己コントロール感の低下を自覚していると言える。また徐々に思考のまとまりのなさ、思考力低下が顕著となり、「哲学的懷疑と倫理的煩悶」に苛まれるようになってきているとも解釈できる。その後感情の波は乱高下を繰り返しながら経過する。操は「……今日は学窓に友を避けてハーミットを気取り、昨は愚俗とノンセンスの雑談に時を浪費する等千変万化一律の以て準となすべきなき事近日の天氣に彷彿たり」（明治36年2月18日付）と自己の感情易変性を初春の天候になぞらえて表現している。さらに、自死の約2ヶ月前には「君は相変わらず幸福であらうが、僕は益々苦悶せねばならぬ様運命を定められてを、……」（明治36年3月19日付）としたためている。ここには理由のわからない苦悶感や、思考制止によって頭がうまく働いていないことへの苛立ちが見て取れる。この傾向は自死の数週間前になりますます強まっていく。明治36年5月9日付の書簡では「……第二学期には僕の生活は全く煩悶と苦痛とで尽くして勉強は少しもせず、……何もかもいやでいやで仕方がないと云ふ有様である……」と訴え、不安・焦燥感の高まりと精神運動制止が顕著に認められるのである。さらに自死の直前に母への遺書をしたためているが、ここには「不孝の罪はお情の涙とともに流し賜いてよ。十八年間の愛育の鴻恩は寸時も忘れざれども、世界に生きて益なき身の、生きて甲斐なきを悟りたれば、華嚴の瀧に投じて身を果たす」との記述がある。これは自己価値観の極端な低下を示していると同時に、完全な心理的視野狭窄に陥っており苦境を解決するのは死しかないと考えていることを意味しているといえる。そして、彼の自死の直前の客観的様子は「何時もの快活も何となく打沈み、図書館に赴くのもなく、亦読書に親む事もなさず、時あれば必ず校裏の芝生に横はりて眠れるが如く、亦睡むらざる如く、鬱々として人と語を交ふるさえ進まざりし様子」（報知新聞明治36年5月27日付<sup>注2)</sup>）であったという。この記事からも、自死直前には周囲から見ても明らかなほど抑うつ症状が進行・悪化していたと考えるのが妥当であろう。

### 3. DSM 診断と既遂の背景

先の章で述べてきたように、操は自死する約7ヶ月前より徐々に、抑うつ気分、悲観的、不安・焦燥感、意欲減退、自己価値観の低下、精神運動制止などの症状が悪化している。また、これらの症状のため、学業に支障を来している。これはアメリカ精神医学会による精神障害の診断基準であるDSM-IV-TR（2002）の中の、大うつ病エピソードの診断基準（表1）のA、C、E項目の基準を満たす。B、D項目についてはそれを否定するような書簡、記事などは渉猟した限り存在しなかった。以上から操は自殺数ヶ月前から大うつ病エピソードに陥っていたことはほぼ間違いないと考えられる。

注2) 当然のことながら、本稿を執筆するにあたり当時の新聞記事をマイクロフィルムで検索したが、該当の箇所と思われる部分が切り取られており事実確認ができなかった。このことは裏を返せば、当時如何に操の自殺に世間が関心を持っていたかの傍証となるであろう。

表1 DSM-IV-TRによる大うつ病エピソードの診断基準（操の事例に該当する部分を抜粋）

- A. 以下の症状のうち5つ（またはそれ以上）が同じ2週間の間に存在し、病前の機能からの変化を起こしている。これらの症状のうち少なくとも1つは、(1) 抑うつ気分、あるいは(2) 興味または喜びの喪失である。  
 (1) その人自身の言明か、他者の観察によって示される、ほとんど1日中、ほとんど毎日の抑うつ気分。  
 .....  
 (5) ほとんど毎日の精神運動性の焦燥または制止。  
 (6) ほとんど毎日の易疲労性、または気力の減退。  
 (7) ほとんど毎日の無価値感、または過剰であるか不適切な罪責感。  
 (8) 思考力や集中力の減退、または、決断困難がほとんど毎日認められる。  
 .....  
 B. 症状は混合性エピソードの基準を満たさない。  
 C. 症状は、臨床的に著しい苦痛、または社会的、職業的、または多の重要な領域における機能の障害を引き起こしている。  
 D. 症状は、物質の直接的な生理学的作用、または一般身体疾患によるものではない。  
 E. 症状は死別反応ではうまく説明されない、すなわち、愛する者を失った後、症状が2ヶ月を越えて続くか、または、著明な機能不全、無価値感への病的とらわれ、自殺念慮、精神病性の症状、精神運動制止があることで特徴づけられる。

ただ、この診断はあくまで状態像であり、大うつ病性障害の他にもこの年代に発症する可能性のある統合失調症や境界性パーソナリティ障害などでも起こりうる。しかし、青年期の統合失調症は一般的に発症の時期を特定することが困難なほど徐々に発症するのが特徴であり、本例とは異なる経過である。また、明らかな幻覚や妄想などの陽性症状が認められず、さらに先述したように操の病前性格は大うつ病性障害に関連の深い循環性格であり、統合失調症との親和性が高い失調気質（分裂気質）とはほど遠かったことが明らかである。これらから、統合失調症の発症に伴う大うつ病エピソードの可能性は否定的である。また友人関係も良好であり、境界性パーソナリティ障害に見られるような通常の対人関係における感情の不安定さは微塵も認められない。従って、操の場合は大うつ病性障害の状態像としての大うつ病エピソードであった可能性が最も高い。一般に大うつ病性障害を含む気分障害は、同じく気分障害の家族負因を持つ者の割合が高い。先に述べたように操の父親は何らかの精神障害に罹患していたと考えられる。そして享年から推察すると発症は退行期であり、気分障害に罹患していた可能性が高い。このことも操が大うつ病性障害であったことと矛盾しない。一方で当時の一部の新聞報道（中央新聞、1903）や最近の関係者の述懐（蘆野、1977）では、操はある女性に恋愛感情を抱いており、それが成就しなかったことが自殺の「原因」であり、彼は「哲学的自殺」ではなく「失恋自殺であった」とする見解が示されている。ことの真偽は別として、失恋は一つの喪失体験であり、これが操の大うつ病性障害の発症契機となっていた可能性は否定できない。しかし、自殺はあくまで大うつ病性障害の結果であり、失恋は自殺の真の原因ではないと考えられる。従って、この「失恋自殺」なる言葉自体が不適切な表現であろう。

自殺に関する報道も含めて世間一般では、表面に見える出来事（直接動機）が自殺の原因であると考えられやすい。しかし、どの年代における自殺においても、先行する準備状態を無視してはならな

い（図1）。これまで述べてきたように操の場合は背後に大うつ病性障害が存在し、それが準備状況となっていた可能性が高い。それでは、自殺の直接動機は何であったか。これに関してはあくまで推測の域を出ないが、自死の数日前、当時一高の英語教師として赴任したばかりの夏目漱石と操との間にあった出来事がその一つとして考えられる。漱石が訳読の予習をしてこなかった操に対して「勉強する気がないなら、もうこの教室に出なくてもよい」と激しく叱ったという（江藤、1970）。先述したようにこの時点で既に操の抑うつ症状はかなり悪化しており、思考力や判断力が著しく低下した状態になっていたと考えられる。まさに彼が友人宛の書簡に記したように「何もかも少しも訳がわからぬので書かうと思ふても書くこともなく、言わんにも言い方がない」（明治36年3月19日付）状態であったのである。この状態が背景にあり、その上に漱石に厳しく叱責された結果、自己のふがいなさを感じ自己価値観が決定的に低下し、希死念慮が高まったと考えることもできるかもしれない。

これまで藤村操に関して多くの著作や論文などが認められるが、本論文のように精神病理学的観点から操の自殺の真相に迫る物は殆ど見られない。著者の渉猟した限りでは、精神分析学者であった大槻（1947）が「巖頭の感」の文章の分析のみを通して精神医学的考察を行っている著書が唯一であった。大槻は文章中の「五尺の小軀」を身体的特徴ではなく操の智力であると解釈しており、「万有の真相」を把握する能力が彼自身に欠けていることを告白しているに過ぎないという。そして、これまで同様に不可知論を論じてきた哲学思想の一派が、あるいは操と同年代の青年達の多くが彼と同様に「煩悶遂に死を決する」ことがなかったことを挙げ、「不可解」と「死」の間には必然性がないと喝破する。そして、操の場合にはむしろ始めに「死の願望」ありきであり、「不可解」の疑問はそこから生まれた結果であると推察している。大槻は何らかの原因で頭脳の働きが退行し、自己破壊衝動が自己保存欲を上回ってしまい、それが煩悶を生み、最終的に「不可解」をもってその煩悶を解決したのが操の自殺であったと主張するのである。さらに彼は同著書の中で「彼の両本能（生存と死の本能）が如何にしてその調和を失うようになったかは、操の幼少時代の生活を調べてみなければ判らな

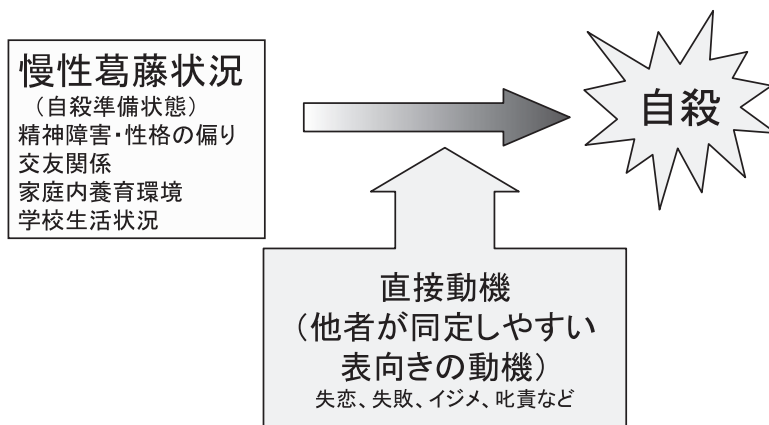


図1 青少年期における自殺のメカニズム

い」と述べており、操の言動の背後に何らかの精神病理の存在を推定している。大概の主張する「死の願望」はすなわち希死念慮にあたり、これは大うつ病性障害の典型的な症状の一つである。操はおそらく希死念慮にとりつかれる自らを冷静に分析しようと試みたが、症状によって低下した思考力、判断力の元では如何ともしがたく、遂に既遂に至ったと考えられる。当時の世間一般における精神障害に関する知識の少なさが災いしたと言えよう。

## おわりに

これまで論じてきたように、「哲学的自殺」の典型と云われている藤村操の自死は、決して純粹かつ正常な思考に基づく「哲学的自殺」ではなく、彼自身が大うつ病性障害に罹患したため心理的視野狭窄に陥り、自己を追い込んでしまった末の自殺であったと考えるのが妥当である。彼の自殺の後、多くの若者達が後を追う形で同じ場所から投身した。その数は未遂者も含めると200名を越えたと言われている（平岩、2003）。その背景には当時のメディアの報道の在り方、すなわち彼が純粹に個人主義を貫いたと彼の死を賛美する報道の存在がある。その結果、影響されやすい同年代の青年達の間には自殺企図が伝染病の様に広まっていく、いわゆる群発自殺の様相を呈したと考えられる（高橋、1999）。また、一人の自殺はその人間と親しい間柄にある人々をも悲嘆に陥れる。これは操の所属していた一高のクラスメートのうち、実に17名がその年落第している事実（平岩、2003）からも推察できる。このように、若者の自殺は殊に多感な時期である思春期・青年期にとっての鬼門である。「哲学的自殺」の存在を深い思慮なしに安易に肯定することは、自殺をその個人の「明確な意志の結果」あるいは「死に対する熟慮の結果」と考え、ともすれば自殺行為そのものを肯定する結果につながりかねない。自殺の真の原因を冷静に問わず単純化、美化することは極めて危険なことと言える。個人的な自殺の真相は、詳細な心理的解剖を通じてのみ明らかにされるべきものである。

## 【引用文献】

- アメリカ精神医学会、高橋三郎、大野裕、染谷俊幸（訳）（2002）. DSM-IV-TR—精神疾患の分類と手引き 医学書院
- 蘆野弘（1977）. 藤村操の少年時代 向陵 第19巻第2号 pp25-28.
- カミュ, A. 清水徹（訳）（1969）. シーシュポスの神話 新潮文庫
- 中央新聞（1903）. 藤村操の死と恋 7月6日
- 榎本博明（1996）. 自殺—生きる力を高めるために— サイエンス社
- 江藤淳（1970）. 漱石とその時代 新潮社
- 平岩正三（2003）. 検証藤村操—華厳の滝投身自殺事件 不二出版
- 報知新聞（1903）. 華厳滝の悲事 5月27日
- 唐木順三（1950）. 自殺について 弘文堂
- 加藤秀俊（1975）. 自殺スタイルの変遷 大原健士郎（編）自殺学—自殺と文化 至文堂 pp.183-201.
- クレッチマー, E. 相場均（訳）（1960）. 性格と体格—体質の問題および気質の学説によせる研究 文光堂
- クレッチマー, E. 新海安彦（訳）（1958）. 精神療法 岩崎書店
- 中村光夫（1972）. 哲学的自殺について 中村光夫全集第12巻 筑摩書房 pp518-523.

- 大原健士郎（1975）. 文化と自殺行動 大原健士郎（編）自殺学—自殺と文化 至文堂 pp.5-12.
- 小此木啓吾（2001）. 神経症 精神医学事典 弘文堂 pp.387-388.
- 大槻憲二（1947）. 精神分析者の手記 臼井書房
- 高橋祥友（1999）. 青少年のための自殺予防マニュアル 金剛出版
- 東京新聞（1986）. 藤村操は失恋自殺だった!? 5月9日